湖月抄

はし姫

223
M8165
51

橋姫 宇治一 細 宇治十帖乃事。娘乃大弐三位が筆としいへる説

あり。師説不用之(ヲ)。故ハ文辞前にかはりたれバ。紫式部が筆

にあらじといへる義あれども是ハ總文辞をいふべく時四代(コダイ)年七

十年餘の事を書る故にさる方にハ人の詞づかひなども不相

ちがひありて行末代にかはりゆくべきことわりなれバむべ式

う筆なるべし 孟 一筆にあらじといふ説も面白し然とい

へども一筆也。紫式部がかきたる也蘭家の説也 細 宇治ニ

呈する事。花鳥ニ藝道(ウヂ)稚子(ワカコ)のみやとあらはし。亦有矣

桐壺帝の八宮宇治ニ遁世(トンセイ)ハ藝(ウ)道(チ)稚(ワカ)子ニ比(ヒ)し。莵神(ヲウジン)

天皇ハ皇子兄ハ大鷦鷯(オホサザキ)のみことと申すとこそ宇治の藝道

稚子ハ春宮にたちまふ。莵神天皇四十一年二月十五日

に軽嶋(カルシマ)明宮(アカリノミヤ)に崩と。兄大鷦鷯ハ父の御定めのごとく御身

帰治あれとて難波(ナニハ)に川藝つまゝへだてて藝道稚子ハ

是は位につきたまへして宇治へ引退きたまへれバ三年まで
諸国の山川調物宇治と難波とにゆづりて納めたまひし時よ
弟の皇子久しくしけて天下を取てさじしとて継とりたまへ
まざとて宇治山に陵ありて大鷦鷯帝に位につきたまふを仁徳天
皇也とぞ紀菟道稚子ハ兄に位をゆづりしハ宮八冷泉院の東宮
とされたまふたのよなきことを並ぞして宇治よのがれたまふを似て
まうしたるに兄弟の事なれバ為宇治巻之一 細 暑記 薫の年などよりて
年記をとるところに付て名ありよ三ケ年の異ありて薫十
九歳より廿一歳の冬まざくのことをみえたり。巻名以歌号
之ヲ 橋姫の心をくみてたかせをさし棹の雫に袖をぬれ
ぬる此うちの詞と一名優婆塞 義なし ひめ 文字濁 一
説をむつき紀まて所せこれり

その比世にかずまへられ給はぬ古宮 孟 その比桐壺巻の発端いづれの御時よりといふ書出し也
細 古宮とハ八の宮也 此宮の事前にはいまだ出ざるに どよ彼細かの時より此宮を入れて書かせられ是は いふ也 当代今上の御時をさしてなるべし 東宮 かも立つべきことを しく
あらはしたり 所 朱雀院御位の時東宮の御事をさらに論ぜざることなりしに 時ふりて 細 冷泉院東宮に立給ふこととなり 弘徽殿の大后八宮を立てんとし給ひしより しが源氏方になりて 此比御たがひの事ありて世にかずまへられぬとて 所 東宮なりしものさたわ

そのころ世にかずまへられ給はぬ古宮
おはしけり。母かたなどもやむごとなく 細 大臣の女の女御にておはしけり
ものし給ひてすぢことなるべき覚えなど 細 八宮を東宮にもたてまつらんとせし事也
おはしけるを時うつりて世中にはしたな 弄 是も東宮のこと
められ給ひける紛れに なかなかいとなごり
なく御うしろみなども物うらめしき 孟 家司也 師 只八宮に仕へし世の人々也
心々にて かたがたにつけて世をそむ 抄 をとなげなるもすくなからぬといふ心
きさりつつおほやけわたくしに頼む 八宮の御方也
かげなく さしはなたれ給へるやうなり。北の
方もむかしの大臣の御むすめなりける。哀に
心ぼそくおやたちのおぼしおきてたり
しさまなどおもひいで給ふに

つゝしにかはり世の中かはりて八代くそのあたりなくなりてあらためられまふとくし文など
歌道のみかはらしと云て
ハみがしくうつくしく
かうされたちぶりの
孟八云の大切よしまふ
てかうりそのそらうし
まふとみり

細 八文字云文字に云候て小言ひ左右ありへしと文など
こしはかられどむかしさはちぶりのふかさ
つれ〴〵さぶらひきし世のむかしさあや
てしりてよまさるすへのとかりしまあ
ま゜年ごろかりまよ旅子を物しばりて
うるりとるまりそれば゛さらぐししく
れぐくおかりすくあめよいゝそで此りう
んらこもされどえやぞとうきぐく 細註角の云く
の給りうよ゛光づらしく女房のいとう
つくりをなりむまれしあへてうこれをう
ぎりるくあられとむひしつきぬてゝ給
よめうさしつゞきそしことあそここい

細 八文
よへんもぞぐくく
かうせと集書しまて
ほうき南じくあるべきうな
師もうさおじきさ八雨ゝの
ようりてむかうるべし家
まそいはさびしきうさ
かすくべし
うきりあるり男まて
細上臈のうす世限りな
ことし八天子とそう旅
かのととし歌王なじりな
なとそうりがらく家ハ
え世ざうこく女房達
のうすを此ひ山 そて

うびしき男そもなにし此かりしくうるよ代
入道云く孟中君之 平産すて八宮子りうし之
すじき海まそしうつしりかはれし給あのう
細母云く
いといりそれづらひてうせあぬみやあ
八宮之 孟八文の歌之
さ海しくれ行しまじふあり あるまつ
けていでしつうるすくさしりて見ゝとれ
かりう世るれどえきすそぐらく哀なるな
人の旅宿さ海うろさ海よりけうじ光
らうす限ぶりかくこそまでしきつれひ
とりとありていとぐすさ海じくもあ
あぐきられいゝりけるすさへつゞくとも゛ひと
まそぐてうそん限じ限ある身かく
いとおこかあしうひとまうりへき事

のちに生れ給ふ
細 中の君の御事をとく給
ここらせまつるを見
つま
おやおもし 細 人〳〵ハ
このこそうき
いそれを人とを
こし そのとき
孟 これよりの方
うせまふそ折ふしを
くなり
このまを 細 小方遺
にりけは中君とく

とげまほしうて、思しけれど、いとゞしげゝれバ
給ふれど、見ゆづるひとゝもなくて、のこし
とゞめんをいみじうおぼしたゆ
たひつゝ、とし月もふれバ、おの〳〵およずけまさり
給ふさまかたちの、うつくしうあらまほ
しきを、明暮の御なぐさめにて、おのづから見すぐし給ふ
のちにうまれ給ひし君をバ、さぶら
ふ人〳〵も、いでや、をりふし心う
くなど、うちつぶやきつゝ、心に入ても
あつかひきこえざりけれど、かぎりのさま
にて、何心もなかりしほどに
て、これをいとらうたしと思ひて、

右に言人々の心には[?]
八宮の心には北の方の[?]なれば久
しうおもに中君を産
てかくうせ[?]母
の[?]も[?]
世の宿業[?]
この君をしも 細 小方の
この遺言をおもひおきて
此中君をば給ひし事
しく[?]母君のうせ[?]故
つかれども[?]
し[?]のあはれ[?]
いさりし 細 中君を
べしと[?]孟中

此君をかたみに見給ひて、あはれとおぼせとばかり、たゞ
ひとことなん宮にきこえおき
給ければ、さきの世のちぎりもつら
きをりふしなれど、さるべきにこそあり
けめと、いまはと見えしまで、いとあはれと
おぼして、うしろめたげにのたまひしを思ひ
出つゝ、此君をしも、いとかなしうし
給ふ。かたちなんまことにいとうつくしう
ゆゝしきまでものし給ける。姫
君は心ばせしづかによしあるかた
にて、見るめもてなしもけだかく心
にくきさまぞし給へる。いたはしく

おほろけの文字のかき
りとかすひあふなり
師のかりしくいのこゝろ
なく

わか君の御めのと 中君之
孟女子とも乳母とよふ
君のおさな〳〵 細 乳母
みつから人称とも見えく
うしろみにせさせて孟
なるへく
めのとにつけたる 細 下臈
にけかる人形さるに堪
君の思ひて乳母の
めのとゝ見ゆるとそ

あさきちかはりて。いつれをかさき〳〵
まちひしつきかへし ぬへしとしるにこと 表ちちなき母ひや
めのとし月にそへて 君のうち抱さひ
しくのみなりまさるかうへし 人も
ちかつきかほも池もりに。えさのひのへとと。
細 浮かくし つかへにもとさうひてまからすかはり
君のめのとも。さうさはしくなく 御小方のめる今は見のらよりまさ沢
しるまへ
あさき人をもとえらめるへは海へふうまれへ
ほとゝにつけたるこゝろあさくまて めさおさきさ
めのとを見まとてなりまゐれとて。そや 孟 八乳之
養育 ハクム 育日
そもくてこしうまふかすかにひろくむり 孟 八の家の母かく
かき見のかけ。山みとの気色そくらむ

ひかくしさ 鬘 棟くく
さとしらん見さこ抱
の椋梁とりおもさ
人のまことそ

菊紅の誠々きり 翼是
より優婆塞が家の下地
よきつまとく

しまりもそいとくいへうあはれまさるとよう
まつれとまかあまふけいしなてともむかく
しるひともすりかれはとりつゝみふひ
ともるさまくに草の係やうまたかは。
のき 野のさきふそ所えうかたにわとくもまれる。
おりくにつけたる花のみとのいろそも 細
くるもゆ所しこゝろよこゝやし路にこそ。
すくむしこともゆかりかれいてつくしく
ひしくしてらむつるまさまてに持
ろ 仏の世かうからゆかしてきよ世路
て明られとなるひ路からゆさしとも 姫君達のかく
りかくはとぬきにひのほるくら

さらぬなり
盃は俳諧ともいふ世人と
人のよろこび師匠なる
のよみ事ハ世かいにみち
れさかりし世の人めい
てこハ世のつねの人の
ならはしなし

細 棊
手ならひにも
の別に帳をさしとし
師匠もの親の人の方
よ別の事しこれこそ
ハよひさくも世にされ
めでたし
ありぬれど 細 言のこ
ともあるしへ下女縁
みとめてへハやしもの
きなり

あしうハわかれなりしもうすしくざりけるが 遊世も自由なるぬは男のあ
業と歌俳人
ちがひしとかずゆる代すつくするつ世の
人めつくいまうしくものとも月より
それく世中と云ふりかゝるつれつゞらかハ
いろは
のかりよたりそそまそ放蕩のうを経
しるこへ例の人のさ俄かりうころぐへなど
さらふれそも世かし物語つゞかりけるなる
どかはしもま何くかどのかすしひへ又世
よまびひすさやうさのとこそハ世間ゆく
りめれど、おりふれハさのとや代世人
けまでのこ
すぞしふは云ふつひそしまそいとくを
ぐるしくよろぎるきこやのくらも、どの

んづき 紙 碁盤すどの
ぞうよ字の盤とまろ
へく足るこしよもろく
俳諧の道すきと世すく
えんそく勝負なしてう
もろし

づくりのそるうくわざりやとひとは
ひさくさゆめして、まるられとつきぐあく
ひろうんそ
あくごろともおいまふれてかわれど
八文の字
うきうしめしいれざりそらは金どのひま
くくは八文武家ざらとりそあそびやうりく
盃篇
おもうけまへにとるすこりし碁らへん
双六 雙は喜 文字の片也
つきるざしさらるきさわそびわざよつけ
てもらうかへどもは姫君
へらうくそくかくとりうるまこし経わ
中是之
あはやかもうよらうさけなりさ俄して、
りのづくうしうげとひいそうれぞくう
ざ西ぐくよおうず甚のうらくうす目つ

池の水鳥どものつがひ離れ
ぬらし　死　鴛鴦ハ雌雄
さられぬくハ死ぬれく
今一とやもて死也杜子美
詩ニ鴛鴦不独宿とあれ
ばかりそめくの事なれ
方にさられて水鳥の
つがひもわかれぬをうら山
しくや思ふ細　ひとり
住なる身にも母に感ず
る事もつくはるゝ也
てハけるゝさこゝく
師大かたさゝめ(ぐ)みける附え
らぬ也。今ハかくかなしき
るすみもものかなしく
うちとそく
細うぶハひの中に余ニめ
ようらのこハ君がやどに
まちゐてまうちうらん
小の宮のうちとおはしまして
いそぎりのよハ蝶てはま
しをてしかりなる綴の
世の中り。大かたこれ定なき世
げに池の水鳥だにつがひ、うらやましく、
みなのげにさへつがひこゝろおなじく
けるはさこしく結しかしくも、つがひの
まめ結ふにもやましくみずかまてあはれ
ないしとおもとへあれ。結いとおかしげな
らいさきけれ。ぐどめ。とうらくさきすもし
結りの様どもと衰ぬおかしくさこぬれ
べかるべとうけまて
ここくの文
うらもそてつがひさへかしく水鳥らら
のこれ世よさらどられんるらつくし
此歳後のさ母之
ならやしめでしのびね結ぶてらいとき
細ハ衣をいふ
しげによかつしまさとなかなり。年比のなれぞまし
わりあるとのあうなさとつあり師
の御りて八般の世としあり。ふ方ハ俊哲て世をさうりありひて君ぞひめござにハふくとられ
くじゃりて後ふかくしらうくすものかく主をれんど也る優よてふこうかりら
衰なうりや
かつしけりや　師　奇の歌を
しかぶ最衰く
かなしのけんぐあり
細うりぶむとくらくらけ
てハおしけるぐるうとなく
ひきみてさり
蓑　娘ををとゝうしけ
ささいあのからんる事
衣とさいるあく
とくりよハ　細　同海よ立て
より思ふなし西よ指も
くけりさき常の楊枝
もつるりくそり(輕)らり菅家
付於て天蓋の眼之寸故
よ眼ハいふこの志とき
あそ於ふと八悲也云也
とりもしよ惣をもくざりて
菅家の日記みも於の
西よ不書とあり
唯れ今のいさめけや
かなしめやと思ひり結ぶよされどさうく
しとかそよね雨めきそし(志)道(遠)をと
しづき結はこゝろぐ人よおもひのうへ
ぐめるどきまてさしけるさ心さ雨
いとなぐしなすり。娘ぞれにをくりとや
とし物さしまそて身あらしひのやうま
うささまぜ見ぞられまうさき(き)ま人硯よは
きうけざなりくくるみなり。まへハそ
ぢしひてつきまよ

いかでかく　細　すだちの時
なり。此哥はとられてハ
何としてかハ人もなく
ぞとや也　師下句に愛身
とりひけて我世のう
き事縁をよそひたるとし
まだよくもつゞけ
孟　すこし人ハ文字を書く
くわしくれども[illegible]
なく〳〵も　細　中の君の哥乃
評　八宮のうまきでは
鼻巣のアタムへしとて　孟　八宮
のかうはしのあるゞ八巣の
中[illegible]
大和物語[illegible]人のを[illegible]
よ[illegible]とらるへきと今
はくるを[illegible]
ちゝ鳥の二[illegible]
らさらていね[illegible]
や[illegible]
経　ぞ[illegible]
細　八宮の[illegible]此君達の
衣裳などにも[illegible]

大君歌
いかでかくすだちけるぞと思ふにも
うき水鳥のちぎりをぞしる　よからね　細　[illegible]
評して云
どそのおりはいと哀なりけり。手はおひさき
みえて、まだよくもつゞけ給はぬほどなり。
八宮詞
わか君もかき給へとあれば、いますこし　中君の[illegible]
中君なり
おさなげに、ひさしくかきいで給へり
中君歌
なく〳〵もはねうちきする君なくは
われぞすもりになりはてまし。御ぞども
などなえばみて、おまへに又人もなく、いとさび
しくつれ〴〵げなるに、さま〴〵いとらうたげ　細　[illegible]
にてものし給ふを、哀に心ぐるしう、いかゞ
おぼさゞらん。経をかたてにもち給ひて、かつよみつゝ

こゝと[illegible]しくゆかしとく
ろくとりてよ　孟　八宮の
さうがとは　細　[illegible]琴譜
へ給て唱歌しまつり
孟　唱歌の秘事は師説あ
るなり
父みかどにも　孟　八宮の
父母之　細　桐壺の帝よ
と母女御也　ゆゑよく引
き絶えなく何ごとも世中
のありさまともかくも
まり給ふべうもなく
[illegible]の[illegible]よ　孟　学問
なして[illegible]上つて世をたもつ
つるとをとると八宮ハ学問
なされば[illegible]
以学文治世以才智覚書
云世中に住付とハ物を
知りて[illegible]世をしれる
を[illegible]ひとゝろそ知る[illegible]
ねく愚案かの説不聞
ぞ

孟　八宮也　菟道稚郎子王仁を師として諸典籍を学ばせ給ふことあり
さうがをし給ふ。姫君に琵琶、わか君にさ
うの御ことを、まだおさなけれど、つねにあ
はせつゝならひ給へば、きゝにくゝもあら
で、いとおかしくきこゆ。父みかどにも母女御
にもとくおくれきこえ給ひて、はか〴〵し
き御うしろみの、とりたてたるおはせざりければ、
孟　学問など八宮ハしらず　ざえなどふかくもえならひ給はず、まい
て世中にすみつく御心おきては、いかでか
はしり給はん。たかき人ときこゆる中にも、
あさましうあてにおほどかなる、女のやう
にておはすれば、ふるき世の御たから物

ちゝみかどにも　細 八宮の母女御
大臣の女也。もと大臣よりは
さかりなるをいへり
はてはてなくなり
孟 何も寳物ハ皆よみて
はかなき物ばかり也
うたつかさのものゝ師
細 雅楽寮の楽人也
河 雅楽寮物師也 職員
令云 雅楽寮頭一人乃
至 歌師四人 律師四人 笛
師二人 唐國楽師十二人
高麗楽師四人 百濟楽
師四人 新羅楽師四人
伎楽師一人 腰鼓師二人
以下略之
源氏のおとゞの　細 八宮の事
とぞいひ出せり 花鳥
にも云ずして云々 花家
に桐壺の八宮の系図と書
[illegible]

おほぢおとゞの御そうぶん、なにやかやと
つきすまじかりけれど、ゆくへもなく（孟 八宮ハ又細も[illegible]）
はかなくうせはてゝ、御てうどなどばかりなん、
わざとうるはしくておほかりける。
まいりとぶらひきこえ、心よせたてまつる人もなし。（孟 世のおとろへれバまうづる人もなきと也）
つれづれなるまゝに、うたづかさのものゝ師
どもなどやうの、すぐれたるをめしよせ
つゝ、はかなきあそびに心をいれて、おひ
いで給へれば、そのかたはいとをかしうすぐれ（細 承るとぞ）
給へり。源氏のおとゞの御おとうと、八宮
とぞきこえしを、冷泉院の春宮におはしま
しゝ時、朱雀院の大后の

後ぞおほいとの御子にも
御后のことを思ひ
女とこそ殿のうらみて
みかどにも　細 源氏の事
[illegible]
師源氏ハ御中よりうね
とますず兄弟の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
みこのとしころひじりに
師世の中を立まじらひ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

よこざまにおぼしかまへて、この宮を世中にたち（細 八宮を春宮にとて弘徽殿の大后思ひ給ふ也 冷泉院をさしのけんとせらる所なり）
つぎ給ふべく、わが御時もてかしづきたてまつり
給ひけるさはぎに、あいなく、あなたざまの（細 源氏方をいふ 孟 六条院）
御なからひには、さしはなたれ給ひにければ（の御事也）
いよいよかの御つぎつぎになりはてぬる世
にて、えまじらひ給はず。又この年比かゝる
ひじりになりはてゝ、今はかぎりとよろづを
おぼしすてたり。かゝるほどに、すみ給ふ宮（八宮の家焼失せしこと）
やけにけり。いとゞしき世に、あさましう
あへなくて、うつろひすみ給ふべき所のよろ

うぢのゆゑひちろく
羽代ハ宇治田上川などに
て魚をとる也八宗
の山荘への羽代のありり
ありとさしこわらうるべし
あづかるらんハよろこびぬ
ひとしあれといひしハちん
師 周君の応字さよへされ
ならずまたそのむつき方
なきさん〳〵表すべし

細

瀧比のむま　そしてそ
なかるあらきねとも鴨
山とりいる為末てそ望も
しるし
みしの人も　孟 かの方ならハ
家の宇世煙によめし
し八家の家のやけうろ
ゆすくまいよよりてあり
申とまゝたかひしまわ

あまりなれハ宇治といふところハ　孟 喜撰
玄中之八宗の山荘之　うちわら山里にもしまてかもりよりくう給
八のくゝ之　ふもとそのへる世すれ代今もとくとらみれ
まんと象よ此浪うあおぢあののあらびらく
みくうし海し北川のもうきらうして高川あ
あさよるすをねらしこともあれどいとかせん
宇治の雲気とぞ　れりみとぢあのあられふともやかに
まうよまそいとあくすぞあ給うらか
のとあしうしくこりゆか野も山の末
細 み言く　みもむうしの人〳〵り給笑しるともおふい
めこそしのとぞねおうあうりなら
うしへもおつもちりよありかしともへ

そうハ今かゝりてむ哀之
山かくれのゆきとをうか
孟 六帖 月よそ出老よまき
まかせ出川のむかえたり
てあるうしやすくに
是の初さうさかのを折ふく
師とひのあく 喜撰の
うち家の初男それを
のかせのひとつむかせぬ世中
のうき
ひじつむらち　私 喜撰ぞ
とおりいへくむつらる
花古今集喜撰何我庵
八敍の〳〵――或書云
喜撰隠居宇治山持密咒
食松葉得仙道云後
冷泉院御宇永承七年
又敷通公宇治の別業
を捨て寺とする也平等
院と名づく後よ高国梨
三口と世て悲覚知院
の西門徒と補せし光
院なり

て我身のうへおりられば　細 そのおほいき　孟 我ゆくぞ
兴しこゝらかわやいとゞ山さきるれ右をと　まなまえ八百れバ宇治へ八行く
こゝらよりかりねまる人ありなしおやかなき
げもなかど我のびらう山びんさも乃こ
まれよそれおもいつくまの孝のわさ
ぞうけるかしおかすかてあしらし給
よこれうぢ山よひさうからあさら
すみなかぞえいとうしここてせの地を
もうかけねどおきく地ほやけるとを
かを出つへいすぞうりぬさうろの文
のうちらうさ様にすゝきまでまひしきさ
けさ海よまうしさけず我をまぜ給つ

宰相 細 八宮もとより身を法文の深き事を御心に思ひ入て行ひすまし給ふさま也

極楽国土有七宝池八功徳水充満其中池底純以金沙布地 池中蓮華大如車輪 阿弥陀経

すみぬへき人のちらすとも上の空也上人

はちすの上に思ひのほり

法文をよみならひ給へは たうとかりきこえてつねにまいる 年比まなひしり給へることともの ふかき心をときゝかせたてまつり いよいよ此世のいとかりそめにあちきなき事を申しらすれは 心はかりは はちすのうへにおもひのほり にこりなき池にもすみぬへきを いとかくおさなき人ゝを見すてんうしろめたさはかりになん えひたみちにかたちをもかへぬなと へたてなく物語し給ふ 此阿闍梨は冷泉院にもしたしくさふらひて 御経なとをしへきこゆる人なりけり 京に出たるついてにまいりて れいのさるへき文なと御覧して とはせ給ふ事もあるついてに 八の宮のいとかしこく 内教の御ざえさとりふかくものし給ひけるかな さるへきにて生れ給へる人にやものし給ふらん 心ふかく思ひすまし給へるほと まことのひしりのおきてになん見え給ふときこゆ いまたかたちはかへ給はすや 俗ひしりとかこのわかき人ゝのつけたなる あはれなる事也との給はす 宰相の中将も御前にさふらひ給ひて 我こそ世中をはいとすさましう思ひしりなから おこなひなと人にめとゝめらるはかり

孟 内教 内典の事

まことのひしりのおきて

俗ひしり 孟

冷泉の御詞也 俗聖之河海 名居士 身在家心出家 在家俗形にて戒行を持 もろもろの人也 四部弟子の中に優婆塞是也 唐にも龐居士なと 東坡山谷なとも 在家

宰相中将 細 薫十九歳の時なるへし 紅梅巻

河内本〈師説〉八葉十九葉のこともくべしとかれ給ひしことせかりかと［illegible］
葉の十月まで此の事此書よりかへり行幸の事紅梅等にも中納言のりしるされたり
書かれたる段のこしたり
紙にしそせかと　細　葉のゐて柏木の事秘ともかへかぎやのゐかりし道心のさゝむかり

こゞすめ　　孫　儀あそう
つとしろくこと再ふな
る給ひてくし　　細　ひし
お家のこゝろざし　師　八宮の
ことの北のかたの二師　八宮は
ゆうせうく是八宮の冷泉院
のいまゝくちかんへんる皇
やとのなるよ蓋れる

ことうよ地のきめでう
師　世上の事とぞかけて
されは聖されまど
いふべく

柏木ふかりしひかしれ
思ふ柏木の千年の菩薩乃
ことどいつまで
此門かくおもくきて
孟　院号の段されども意
　　にて院の帝と申るゝ
也
きうひたりのおもちに
八宮の此ゆきをかくもちの事
くま系のゆるぎこにうと
うらんとされせぞくく

十のみこみそ
細　冷泉院の注は之　孟
　　宮の北方とも　師　上観
いちしもとく出んかてい
みどかかせらるゝ相也
朱雀院の　細　院の御子也
入道の宮の事しと大夫
三宮と源に移る給
どふかゝし

かゝるはとめども、らちあかしくそこらぐされ
きどくあれども、ひつ、ぞくみつゝ、ひきち〈八宮の事をいふかし〉
よなる給ふころのそさそしや、いかにしてこう
とじめてこゝろ給出家のこゝろざしかたくとも〈細　けりてのほいにや之〉
まし抱志まするをかくるすることよりもひとごこ
かゝりましなりていふさしき女子とも
のほう色とえまりひもそてぬしるべんなげ
こ給ひりまふとゝそうくすくまとくよりの〈細　聖の給ふし　お本給ひ〉
めかうわざりみく、げみにきこの姫宮
ちのことのさむくをてあそびのむへ〈おほひの〉

院よりてとひてゆきへ給ひハいでとゆりしつく〈孟　古代に心ゆくしきこと〉
柏木ゆかりひやしれ給ひやくしくいまめ
思ひげ此門けへもまさてさうひきらかね〈孟　冷動之〉
つまよゆひまくゞのせかしきご雨へむこく
しかゝらんとぞきうしらかしくと思ゆうしの
ことやぶうまろあうくそひきそてうくれつ
こゞうひのうんとりしまぞくしもとまられん〈孟　姫君と冷へまうせさせたまうけ〉
かゝたはゆかりやへしのかうぬうゞもぞの給〈師　ゆうろまいりしと〉
なきうこの院乃みかどハ十のことよぞせとへ
しるゝすゝく院のおこ六条院よおうけき〈源氏〉
こしあし入道の宮や乃ほゝかしこと思ひがし
いそぐなの事ぞうらとぐるに一重ぐくみするわろ

みかくみくの
細 帝の御すみ家よりは
八宮の姫たちをゆづりやはせまほしく

世とは 細 冷泉院の世
をいとふ御心のふかく
おはしまさは八宮の御方より
隔て給ふとなり 孟
宗祇云世をのがれ給ひを
おしなべて其世の人
とばかりおぼしめされば
ありや隔つると仰せ也
つらつやは八宮より宇治

てらやつぶりしてくさ
めまとぢか聞く
此御つかひを 細 聖よりも
御三諸ありて此方よりきこし
み對よ御伝えそへまつり
世をふかく
あらそえて
よ世ろを思捨て 細 後も一緒
あらばしく表擬らはよ
つらも桜くらのかくむ
まいらす八宮の方より
まことおもり給ふ宮の雲
の八宮よりは山八住うしと
ありたるべし 孟 此歌
八宮のすまひはもとより世をのがれ
れたることなる宮のよ川の
ながれをよそに見えそひて
やまとよりかくのなかれ
おもひとりて
ひじりの方を 細 後八や
ごく述懐のあるやうなる
義は御らんじとがめさ
せ給 師説をえてかなしむ
となるとはいへど八宮の

づれ〴〵なるあそびかたきになどうちおぼしけり中将の君
なか〳〵みこのおもひすましたまへらん御心
ばへを対面してみたてまつらばやと思ふ
心ぞふかくなりぬるさてあざりのかへり
いるにもかならずまいりて物ならふべく
まづうち〳〵にもけしき給はり給へなど
かたらひ給ふみかどは御ことづてにて
あはれなる御すまひを人づてにきく
こととなどきこえ給うて
世をいとふ心は山にかよへども八重たつ
雲をきみやへだつるあざりこの御つかひを
さきにたてゝかの宮にまいりぬなのめなる
きはのさるべき人のつかひだにまれなる山
かげにいとめづらしく待よろこび給ひて
所につけたるさかななどしてさる方に
もてはやし給ふ御返し
あとたえて心すむとはなけれども世を
うぢ山にやどをこそかれひじりの方をば
ひげしてきこえなし給へれば猶世に
うらみのこりけるといとほしく御らんず
あざり中将の道心ふかげに物し
給ふなどかたりきこえて法文など
の心えまほしき心ざしなんいはけ
なかりしよはひよりふかく思ひながら

細 躰の身を卑下し給ふ
花鳥餘情 八むかしの頭書ニ
出て松根の如くに
こゝろをしまふとなし
世の中をそむきがたける
らんも　なき人の法文
などよみつゝハ道世
のさしつく人の如くも
さして悟るべきよしあり
ねどくし
よのづくしう出家
世人の如くあらば
とくも我心世をそ
ハ解無あること
いとありがたき出家
八文の御おかき経とあざ
あふかでてうろとし
経ハよう給ひしかど
孟 菩薩の心まつるを
八文へわざらのこと

あらぬ身のうへをもやけつゝさらにいと深
なくあはれなり。わざとしもそらごとならぬ
法文などを
ありしひとさへかくおもふらん　薫の卑下の詞を書ゆかしき也
ぬ身なりしに世中をそむきがたくおもふ
もどかしうよあるねど。よのづくしう
もなく出家のつくしてるんもな
いとありがたき出家となりけり
ふしみかくころはうけそもんなく
思ひまかせて経ハよう給ひしかど
さうき面文世中をうちそめれらく　孟 八文の心 細 八文の事
よそひらいとおしきこころのつきさそ
ゆかしとも身をはられへおる時なんど

てのよとうしめしうおさのらじめあり　細 思ひなくてハなんへおこつくさずうまぐ
てるんざうさんもとこちわざなめるな
と。弁わりく世中さよまうるひるにご　孟 菩薩のうへ
よもあるぬことハあはじと世はゆう身　孟 おもふ不足ならんずくもひさんく
の後にきさるこ後世をさへさらむより　のちのよ
経るんがありうさうてみはさべきうや。　かけ
さいとひらるれうとこととまうたにくる
どのもとめ世のむけ経やうなからん後ハ
て。よのつゝしてさ川うちのさめりにいのる
ひゆけど。のうもくなきさんらむらうよ　八文の心ハ存命久しからまほしき
ろうくさてとあしそでもぬくべうあるときさ
しきこのも思ふさまにもえしうまるく

こと出家さべきうや
細 八文の心身ハさるべき
しく仏のもとめるま
やうかう世のうきこそ
しそうくいとひぬれと
し 孟 さるべきやうハさる
べきこうやしお方にとされ
焼亡よおひるじて世
を背くやうよかるらへ仏
の御まへめくし
まうさめ未だしくは
所生ヲ不知生ヲハ始ヲ不知死ヲ死ヲ云
死ヲ終ヲ不知とらんし

草の庵り　此文のさまを
[illegible]
いとまの庵とある山里
のさま思ひやるべし
[illegible]
遁世のかのありさまとゆる
よし百首の入首略の事也
[illegible]
水の音波のひゞき
細 宇治のさとらの様之
風ともいひて吹払ひと
いへることそう殊勝也
師 物忘れハ[illegible]
[illegible]波風に[illegible]
[illegible]孟[illegible]
[illegible]
[illegible]

思ひしらるゝを、かへりてハ心はづかし
げなる法の友にこそハものし給ふなれ
などのたまひて、かたみに御せうそこかよひ（孟 八宮と薫とく）
みづからもまうで給ふ。げにきゝしより（孟 薫の心之）
もあはれにすまひ給へるさまより
はじめて、いとかりなる草のいほりに
思ひなしことそぎたり。おなじき山里
といへど、さるかたにて心とまりぬべ（山居の事にて閑寂の面白きをいへるとぞ）
くのどやかなるもあるを、いとあらまし
き水の音、波のひゞきに、ものわすれうち
し、よるなど心とけて夢をだにみるべ
きほどもなげに、すごく吹はらひたり。

彼の[illegible]
八宮[illegible]
奥入に法苑寺日村の寺記
不可思議[illegible]
仏の[illegible]　孟 姉君
のこと[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
細 上網よ世の[illegible]女君
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
されど[illegible]
細 薫の[illegible]
[illegible]

ひじりだちたる御ためにハ、かゝるしも
こそ心とまらぬもよほしならめ。女君
たち何心ちして過し給ふらん。よの
つねの女しくなよびたるかたハ遠くや
とおしはからるゝ御ありさまなり。仏の御
へだてに、さうじばかりをへだてゝぞお
はすべかめる。すき心あらん人ハ、けし
きばみよりて、人の御心ばへをも見ま
ほしう、さすがにいかゞとゆかしうもあ
る御けはひなり。されど、さるかたをお
もひはなるゝねがひに、山ふかくたづ
ねきこえたる本意なく、すき／＼しき

あざれだしやんもことにさ
ざひて 細 あざれハ濃
く 孟 法文とあて
まさてゐるのことと
世ハおさきやうゐると
葉のるく
うぢそくゐびうをこそ
小山の 孟 俗形ゐびう
法文まうと優婆塞
くりつく うしそくう
とこあふ山の稚がりく
のゐそべくし唐り
ゐしねバ
いしうくのさまひきてれ
八衷のふしといさ世のふと
葉のるく 細 葉のるう
所 是より八宮の法文の葉
ゐまみうひゐるのにとせ
づけまふく
まうしくの俗形
所 宿徳とハ徳のゐあ
うろく常の修りゐるん
く耆老ゐずしいふよし 同

まの人あうね 細 おは律お
戒の人をいふく 細 無骨之
こうたりけゐ 所 俗よれ
孟 ゐるげく 所 俗よれ 無骨
りいやうなりと
ゐうとひゐすうゆう
けんくさ出袖ゆくことゐ
めしられて
さして寝ゐうし法文を
学ゐまづきとはいあうぢ
兄やそく 同文あくんよの
ゐく

ゐ修ざうごとくとうら出、あざれだしやんも。
こゝゐうぢひてやかうど也りひへして。
八衷のふく ゑやの海宵さ海のいとし哀ゐまとを約ん
でゐゐとあくひ此のことあひ、さびく哀り
路つく也りひしやうまうばそくゐびうこ
とこあふ山のみうさん、法文なりとわざと
上臈のさまし さうしげかはあくもでいとしうくの路し
られひぢうじろん、ざうえある法しみぞ
い世ゐ出侍れどあまりこゝはく哀くけ
ど絶げゐ、きうしくの俗形俗正のるゆ
まく、世ゐいと海ゐすくさうみすまそ、抱の
ひとしひあしゝハさんまことぐあくく

えゝ路文きの人ゐうしね佛のおでしのい
むしふをさりあぢうゐのうこしきけあ
まで、けつひいやそくうしづこそごち
ゐげゐめのゐれさう、いとめのきくてび
子ハ出月やけゞくゐいと海ゐづくなぜし
つ、きかやうゐうしひのやとげらひきは
推ぎとゐしゝゐあしいれりうひ路ゐるい
八宮の出すとおゐ路るし
とさみすうゐ抱むつしくみ、このとあゐ残
いとあそゐこゝろづし死さ海して、のこ
まひ出ゐしのくをおゐじれの海を
孟 経譬喩
しへをま、そくぢうきしひゐへ、まぜ
いそこゐゐくあうきれさしゝかはあゝ

まことに人にも 細 吉人ハ花
鳥の愛用之 花ハ見人
ハ貴き、人よりハいやし
ことをしれり、旅人よ
めづるを蝶と鴬とをい
ふ、そを見人ハ智恵を
て花の心をもやくさせ
るもの 行海 頂あやまれ
なし 暁 遍去の善因よ
よりて、そのまゝ人と生
まれ 智恵あらく花の
心をもえさせず 上下 一節わ
記し

ねどもさん人ハものゝ心をえまかさこのい
としこゑよあしのふかれどやうりくるよ
萱のく きなり給ふびこゝよつりよころうそま
つうまりしてゆくしまるくなどして、
時どふり時ハ忘うる物にし給ここの気乃 細 宇治山も忘て宇治の師萱人
くさうこゝんにさそしまつれば、冷泉院
らをつねよもせうそことおしありて、
年比どもふとおさく学へおさず、日こ
しくさびしけるうしまどくるまやう
扇つ人めくる河くあらおらあすよせ
おひきそし給ひしいふめしうこれ素都も 風海
まげさらんさとくるよつけつ かし ますや

細 萱十九六丈一の年なり
花鳥年の是おり、萱宰
相かく三年沖宇源之
者伝給ひて西そのら
中納言とみてくり 暁
秋のまつるて 細 八月なり
四季よ七日法くの念仏也
師八言のところなひまつて

うかもじすめやうゝさ夜ふくこゝるよ
とつうまつり給ふしそしせどもう
よかりね秋のまつるに四季のよあそて
し給ふ念佛をさ法づらハおどろのるを
をこれどふハいとくうし扇しく忘
づりなしぬるとてよおおざりのさむ寺
のざうまよりひうひすて七日のほどを 八宮のうらひまうて
すひのよ姫君うらハいとくほくけ 八宮山寺よおはすをはうれて
まうれまさりてすずめ給ひるて中将 萱人
の気ひさしくまつしぬうれとひおさ
こし給ひつまくよきぬの月のさぎの影 かりかけ 孟九月下旬のかうえ
あくさうし出つ時どよおりうていとも思

○八の宮は 細 宇治の方也
南岸の橋寺の在所也
宇治橋は孝徳天皇大
化元年丙午道登造之
橋寺と云 師 橋のこなたに
どといへどもなりけるぞ
の姫君おりて 細
しげきの中を 細 一説深
き野中ところ不用之
茂木の中をいふべし

山おろしは 細 あやなくは
わびしきとよむ也
侍めの前あはれとひかり
師この歌なとこれと八附
前の感激なるべし
まかの紅葉の日よりも
てりかくぬれゆく我なる
ざられ

あくのまうさ 忍とう
の侍く 家くの者のう
きしどはる侍く 師下の
何よりのすぐれるなし
思ひつきも山里の庵
めしおくぬかくそでうく
師めしおくぬ者のよ
むくれ秋の時よさうねさ
うけしかかるまをそを
師思ふく家くと八薫
の匂ひを来て供とより
まふでるがすめくみ
えし

びておほむともに人などもなくやつれておはしけり（は薫の御事也）川のこなたなれば舟などもわづらはで御馬にてなりけり入もてゆくままにきりふたがりてみちもみえぬしげきの中をわけ給ふにいとあらましき風のきほひにほろほろとおちみだるゝ木の葉の露のちりかゝるもいとひやゝかに（秋深き木の葉かくれの…）人やりならずいたくぬれ給ひぬかゝるありきなどもをさをさならひ給はぬ心ちにこゝろぼそくをかしくおぼされけり

薫 やまおろしにたえぬ木のはの露よりもあやなくもろき我なみだかな

山がつのおどろくもうるさしとてずいじんのおともせさせ給はずしばのまがきをわけつゝそこはかとなき水のながれどもをふみしだく駒（こま）のあしおともなほしのびてとよういし給へるにかくれなき御にほひぞ風にしたがひてぬしゝらぬかとおどろくねざめの家々ありける（八宮の琵琶…）ちかくなるほどにそのこととも聞わかれぬものゝねどもいとすごげに聞ゆ（盃 薫の心）つねにかくあそび給ふときくをついでなくて（八宮の琵琶上手の世にきこえ給へり…）宮の御きむのねのなだかきもえきかぬぞかしよきをりなるべしとおもひつゝ

（盃 八宮はらからの琵琶琴也）

琵琶のこゝろのおもしろきをしり
きこれたることしゝつきれ
ひかのねとおり琵琶を
以て定まるく
わうしきてう　細河海よ
ふしきてう　河此黄鐘調を
笛の黄鐘調を比巴の風香
調を比巴の黄鐘調よいハ
らぬを比巴ハ風香調及
風香調秘曲あり。楊真操・
流泉曲也仍以此両調子ヲ
比巴の黄鐘調ハ笛
の平調よあわせて掃部
頭貞敏四調と定めけり。
風香調ハ合笛黄鐘調及風
香ハ合笛盤渉調下黄鐘調
ハ合笛平調上清調ハ合笛平
調盤渉調上是也下略
さうのことをよ　細
けうよ琵琶ひくことあり
く師筝ハ琵琶よりまさ
ハさこうすぬるや
ありしきんこりけり　細帚木
以継てけ道るといふ
かせしそこにぞまて
八宮のけうに今業のれ
もしさうり　つかさ
くとも

つたへたるハ琵琶のこゝろのひくかたを
まれにきこてゝうにあまへてつのつねの
きゝわたさるれど、ふかくしもやみくされね
うらしてうきさをもとどらの音も物こし（琵琶よ下りうたうさまをうわのさいて）
しげよいりろしさうのことをよかの海
めづらしく思してゝえぐゆの音もつぐくさ
海ならしきよきなのひさかへどけなるひさ
あくまつけく夜ねんめくおのこゑきまよう（きゝひろえし）
くさしさいかくさうりむすくるんこゝろ
ゆらしきそれをうそこそそよかしさせ（細 業の行 西静敏の伝 七日の会伝之）
めとめもそ、あすよりはしりかうぶりおりれさし
かしひの琴とのやうにうらしやかしきこえんり

あはれにめでたくきこゆるよう
色しんられへを姫君のけしきよまさりて
来しをの給わせハおんおぼくきむべきのうち
へどもおくさうほしらむもてどかせ給ふ（細 帚木人て）
んとそこし也。あらしやさめしきそ、年（細 業のあひえしまて）（西業見）
どいんつてよのこゝろそゆかしくせよれ
しものむしとどうましさせりつあたぐし
をさらしくれくさくべきまののくら海
ありやつきすくさしるてまりもうん
ねどられてやめあそくいと泪いすりくん（細 業の宿と帚木人の出でこ）
この後これかひちるらの、さゆかなそく
しまこらみもいうめぐしつくうじけ

なくゆかりあれバひとしらぬ時ハおほけなくれ
細 よの人の句
くらんおそだくせじこゝろじんへあくもしらや
孟 東よりこれハ下人のまうせる也
このとしらまうくらうまじる人へ倚りと
孟 聖となるべきとも
さいとしもみきせ給ひぞえかくさうくても
孟 八宮の御心むけなるべし
気らうからつしなすしとはげくさせまひ
なすべくのひとよあつまなもらじとゆし
葉のて
細 葉の句
の給へとらとやまをばこらうひてあら
さかえさげりのくしけらうあるあのび給ふ
世どこれ人あづくさ世のこあしまなさて
出べくありあまものまて、かり給ふるべきよ我へ
もとさくあてきらうろまとやきとん、ぞうく

しかりしかんれなうる御のおやしく
あへよ也なり　細 此よの
御人の心なるべうしまて姫
君達を後らすくなせ
まり不忠のくすく用さ
すまるも也　哢曰
げまうすへてまゆかりし まもねるすりとこまやや
孟 此よの御人の句くはしや倚るんとのひぞちこと
まるのまへだおぼゝしこゝろすきやうよ給
れちらとなりしのこゝろや倚らんとそおきのこくの物かへ
文集竹編墻
花 このある人の句
ハしけのそいかいしこめてこれつぞもこ
とするいひとしへきをしもそゆ河うれを
りの人とふしのらうしのしひさへてこの御
ねべかへあくらよおあすくらよかかうべうめうとと
いかいの戸、ともとうしもあけてゝすくぞ
孟 おもく
まもり姫君のうへ
月ゆうしき御ともよさうるるれうなるがめ
てぞふれとをこうみじくゝまさあびらくて
ねとらぞものこまいとさむけよ御倚らく
なへぞありうそひとらゆかんじ御なう

おつくえして
仲 琵琶の撥の形未底
こゑよと何ぞれ八女王の何
いろすく月ハえしらくも
撥さへしといふ撥月
とハ熟字もあるにや
河云月隠重山擎扇喩之
又云水原に月を
あらはす説あり不用之
又云後漢孤竹院此物語の
以扇招月事を借て
まねかれしに何を発
申し後日ニ基長て漢事
よありて諸説細流
にハ月ひかりと
いり日をかへすを 細 中君の
詞也おほくのうちに
こゝにて 輿入還城撥
王とのやうなんとも日の
ゆくに撥して日を招
ようさうへとといふ事ハ
淮南子并史記魯陽以戈

見やれはうちなる人ひとりは柱にすこしゐかくれて琵琶を
まへにをきてばちを手まさぐりにしつゝ
ゐたるに雲がくれたりつる月のにはかにいと
あかくさし出たれば扇ならでこれし
ても月はまねきつべかりけりとてさし
のぞきたるかほいみじくらうたげに
にほひやかなるべしそひふしたる人は琴の
うへにかたぶきかゝりている日をかへす
ばちこそありけれさまことにも思ひおよび
給ふ御心かなとてうちわらひたるけはひ
今すこしおもりかによしづきたり

細 是大君也 仲 撥とうけし 大君の詞也 細 中君也 中君の詞也 入日をかへすとハ本文に撥をかさねていへる 大君の詞也

陽ト魯陽公戦陽にて日
日暮ぬるに戈をもて日
をまねきしかハ三舎をかへ
日のかへりしといふ事あ
また撥とを撥と取かへて
まやふられし細流
わかしらうべくもあれハ
ひよ日をかへすを撥あり
またとかへし
まよへるも 細 大君の
細 琵琶の隠月に撥へか
けわかちて隠月とか
さしつゝのなれそうくい
つり花 琵琶の撥をも
撥手の上にあり李嶠
琵琶詩曰半月分絃上
ふそよみひやりし
細 薫にのつるの女ちく
あひなきかたさへ
やとつゝしき
細 古昔物語
むかし物語 つきの物語をかけて物語にみゆ
細 往昔物語り
姫君の琴ひきのみと中将

およばずともこれも月にはなるゝものかは
などはかなき事をうちとけの給ひかはしたる
けはひどもさらによそに思ひやりしには
にずいとあはれになつかしうをかし昔物
語などにかたりつたへてわかき女房などの
よむをもきくにかならずかやうの事をいひ
たるさしもあらざりけんとにくゝおし
はからるゝをげにあはれなるものゝくまあり
ぬべき世なりけりと心うつりぬべし霧のふ
かければさやかに見ゆべくもあらず又月
さし出なんとおぼすほどにおくのかた
より人おはすとつげきこゆる人やあらん

薫の思也 薫の心也 昔物語にかゝる事のありしとおもひしを 姫君たちに心うつりぬべし

の芝付かるゝみてゝるゝ又ゝかや廿四二月廿日ゝろきタぐれハ宴今京姫君へ入らせ給ひおけ
ご琴ぐまり引合をあそびますふさゝあり
うしまかしぶりかんとよろしくもしゝ〳〵ど　ゆかりのまへあかまじらく
手をつくりものがくりませんやとみて〳〵そしつりし〳〵く
げふあそれから梅の盃を　昔ゟ降ふもひじらくまとよふく表みすの梅乃
浴れハあふづさ世上どうしゝ此ゟふよ業平の心此姫君よ〳〵昇しと思ふ紀よ立え
さやうふと見ぢべくもあゝぞ　師ぶゝ此かくゝさ気しうぶ此り給し
み月さしあるん　細　村雲のさ盃さやうよ見ぢべくもあゝぞし立く又ゝやゝに
出る酒白し　盃　村雲のさし此月のくゝる也ゝじめもさゝおろうとかゝり又田賽り
て盃めをさ〳〵見ゆ
此ゟるゝがやよへあるぞ
盃　人のしぞくあらく見へ
かゝくともるをとゝくる
しやうよおりそれべく
此さまりさる衍やえ。
男女よ通してんりらに
なゝんべ〳〵〳〵
京よ海車　細　鉄を呼ね
べゝしゝくしいひやり
なかくれしく
姫君の此の春どゝゝて八
文の内留ゟも出くれ
しきゝくし
いゝゝめれかゝゝ
秀よゝゝまゝめれま
ゝすを姫君よゝてえ
まりしてゝ也
細　呉今まうゝゝ沢
申せゝし
ゝくえゝやしゐゝんとハ
細　あよのぞさまあとは
まり給ゝぞりて
盃　せうもこ気ども
葉のうえがなよ此せう
そこつゝそのる人と
うねくしさんなれバ
やふまゝにいや向ゟり

姫君葉　わしんもぶれ此ろしてられいゝぬ此じく
の上﨟しきゝ盃へ　ゆきぶかよハあしらもぞなどやうよりく
すしてやそしられなゝけゞひどもじき
ぬのどともをずいとゝるのくちよんゞろゝし
くそゝいゝゞゝあそてよゝやびゝるゝ此お
葉のうへ　られと此まへあやゝ　盃　葉へ　ゝそしゝゝちあゝくあおよ
侍女人どりかく　細　君の内留ゝをそろう
つゝきふんひよおりわくまり給よ
ゑれど。すかくしまし〳〵此りふことしも
盃　葉の盃なんのお肴て
しぶずくまあそちんゞくもつゝ梅りにさ
そしよいゝゝめれよゝゝどともゞや
侍女人姫君よりゆくえ
さをむりしゝのゝかまくへぞまりてゝゝゝ也
姫君葉の上　くくとえやしゐゝんとは此ゞりもよ
琵琶箏引きかへ　らぞ打ちどけまりつゝとぐまとそく
やしまつんとひいうぶくゝろうし。
盃　女ハ葉のまぞあゝゝ姫君葉のうへ
わやさくうゞつくめかも風の此ゝ
どぬりひけぬ御ども此れハ此ゞろうさ
盃　姫君葉のおつけすて
まりゝらしろやそさもあししかとあぐひ
てしゞかへさうもとはせうそこれじは

こゝろ人をいとうあくしき人なめりと
おりしもこそしらびのゝしりものし給ひ
て、まいりこゝろのまゝぶれたるれいはおぼろけ
ことすのかゝ人はわゆいそくつね升給やま
里びたらわら人くしもこさしつらくんえ
の思ひと見てぞれ志らねさし出たる御方
うしくもげなりとのことを哉よへく
しさすく給ひたりつけよおさ給へ
おらふくへくをもおひまうすがき
やまのかげらよもさまあるなさ御ことゝも
ともに家はきとひとうねてはべら

うけ給はるとうにこゝめやうなるの給わざ
人ゞのあぐつらうゝ物さとしあべきこともな
くうつしうらうしやうしおぼつらうも、かう
ちらいさくるれど、女のおもよろしきことを
やうしいつ御心、ゆるしくねてわざとしめ
いとうもらうしてとのみいひもこそ思ひ
らねまちぶ給ひそもうれ御おもいひいはぬ事
めぐらしいてとめしあらてあさくやすうこぬ
してしりさいうるのがく御のままの給ひの御
ちうぞうくるしうきは花てもうかやうらも世の
さむらむとひすへもうはひも思ふしとおまへ
御めのせ給らんとそうらおしうからんそれ

まし結めをまげ候を

よくとき

あんばいよく　細　八文の絹

こゝも也それよりかくひの

ふ勝手すれば何事も

し悪しくなりつる結

ぶときは　師　父母の

心をもしまはれんとすれば

ひとく姑の心をもよ

く用ひらるゝ人と

くるしれ給ひてく

拾遺に花よけらる人

とも[illegible]やら[illegible]

親のこゝろせいふかゝり

心のしられもどしうるよ

よのつねのすることをす

なるは　世上の婦女の着

のやうな業を心かけて

あつかひなるものとまへ

なるへくやうとは絹へ

さるすゝみとものく

よそのことは　細ぢとき

まづうしろかみをもひもをしかくさせ給れこ

とをねあどくよくしくひきさせ給れ

ころのうちへおふどしこしもそしくそ

くるしれ給れへあ給くそのひおもう

給かうさわそての後も。けうを給つんて

そひへ給ふ。兆よのつるのもとみゆくし

さもさらはぬかしめしあうけへらやさ

在らのうこそわさてもよしうけ人給かとも

るひくべうりもおしねらうらづりてまるん。

そのつゝしへらうりおいはすゝやうとも給

今業ひとりけし

るるん。つ世くしのしもそし給ふ。世の物

抑すえとすのゝ又大善しらるす

給しゆのしこゝ[illegible]

師さやうの総衆くしくさせすはいかなひ世業のもしむう人ありうける因はを海

じきことく実くちうきんをいらんそのつゝ

とのつゝくさいしあかいならう　盃業の文法なるすへ経典なるれいとの

名業と志うめしらんとらぬく

とかへたすく　細ことく

れうなすはらゝのおかる

いらつて　師手がるすの

おるましるそしう何る人

おりもとて母まり。吉公

ぶりひさまへとしかう

あなくうちまさそまはいこし

をはうかうしそるる標業

のものあをよあるよよ

あうくらこいめんとお[illegible]

くらふゆへゆゑべし[illegible]

とく

みなのうらよぞ　とまの

うちみそゝれなうらを

ござるとどく　盃　こそ

とらぬ事ありてあるぞと

しもさし師細きて八るを

じや　細七八　うちのうちま

こそそとうくさうべしと

さく經書義身へふゞと

世ざるれくなりあさせまうへはん乃

うぶおそいらんがし

まださうくさそとさしと物かなろ　業なさうんそ得ゑまり

ずまつらせなゆびきえどまもと

づりるうえすれ給ういつまゆふさ

抄大夫の心も

海ま給るんあひゆかくのまへいつまかく

私の申すくゝ乗

くいへまらておこうつるおいひへのおる

のおゝのれゆそあし　さへ人のぶ每と

よろまそゆつり給さしへそくれしそ

師をとり無くり領し

がつくおるうちさうあらすやさこいつらに見

盃中唐の御命あるやらし

遊りのさ海かと給かられうもしのまらま

ぞ

ざる

そうるきへざいふのかどもちぬやへはとを

あどちてくうまいさざものゝささすゝさう

あるまじや
まことにかくいふのかれども
らぬ　薫とうちくし
くあたりにひかるゝの
をかれとみゆる老人の
詞なるべし
ひとつうつくしきおぼえ
いはゆるを　孟　弁が事
とある中の末のおもひきこえ
あはれなるありさまのゆかりどれ
孟　弁は人にもありきさま
薫の御出はなさてきこと
老人の詞也
あさましきまでにおぼえ給
へることもありしを
薫のくびをうたれ云
ありさまのこと

とゝのへつくしたるおぼえ給ふが、いとくらし
あやしく世中にもまれなる給へ人のうちとま
をかしらぬ(大かた)さまおほくさしも人つき
人にもしらねみちに(いひ)つゝとうへの給へ
んでおぼしよしひときまへのあれ給
えさてもあはれなるおぼえ給めりよ
あれとくるしさきのいかにおほせ
をかしらぬこともあさましうおぼえ
をひきかへさせ給ふとかくおぼし
らうぬかはしたるゝ人のうちへ
給ひつくしきやうのゝんといひつけられ
くわかれしをもかたみくさしのる
けしきいかなるめりけれのことやまし

いとくかはしるしてつなくものを
細薫の詞しいてくれうき
なるうちうはへさたく
給はゞもをとおもひきう
あけるさしの
されは薫の心は露なき
なびさうきてはきりと
も、御覧じ知らんと乃
あひし君は姉君の御
ありもおもひあるぬ事は
までものあひしと二所
とあかりかみめる御給
かうんでもくちかしな
ねたきのひしは今弁が
のさ人はかてあはれと
いひ給ふぬ弟かも候
ますますて思ひいのち
えさせともひまうきこん
らふも弁が和あなる
どやうれはゆるもけはひ
おひかくうのさうきに
きこえ弁　細老人の詞
薫の御んいそくとも孟老
人の心なるべしいかれども

なれば、いとゞ(細)さなさへぬなくなくし
はるまうれしきゝけらひまでそだちかゝ
こゝろとけるもひきる給ふさくのをこよ
なかりつるそれをりぬをまつるは法ホ一乃
そはうかしれは明かしくやうくりおく
いうまうて、よけにやつしさおりつるさと
ゆるうさおぼうくいとめれあるり
さうゆるしうそとこの世の明みのまかひ
まやもかゝりし(こ)すでに限りこらうみ
このおいなくしうるゝねさしとくさこう
つよまりやと思ふまへ云のかれと、象なるむ
くの(こ)極楽のいかならんついてまくら

うしおきてうちやうちうりきのゐなく
哀なるむすの御細抄
わんぞの後かぞみをし
うち申せ　仏よしるふ
此は葉にめぐりわ
人せて此本意をとげ
させめつと祈念せし
ものしもやうくて御め
ようろしのらく
みかくこさうごすぎ
細 葉のゐく成りゐる
「老人のさかしらいかなれば
そのかたはらよりきと見
ともつらく 孟同師無は
柏木のうへと云ひて落
涙されば葉はうきんの
中と知ありねよありや
にしと也ひすらく

柏木の遺言 おほとのこもりせざりしことゝいふく
おきさしも世のくるしみをも涙のめしるし
うしめきせんゆゑ年ころわれなきのつゆぐもり
もさにすぐれたまへるものし給や
う其のしるしあれ給ふ悲しさとは物がたれ 今の御のおもひしと
うち泣はこれもえこそ当しきせ給は給
ことしにうくはしさ申しつくしけれはつり
く柏木しも立り給ふことさらに御 葉のこし
宮人は涙うらんたらなりのにはみなし
へはしくくしこともゝさもやしらけり
なさ家ようくすゝしとはゆるひさまにうち 細葉のかこ
いりけるはる我きぬのへきうかいてし

れしまつのみなおもかせと
もとものさいひすそりし
孟 此はそよくれはのと
さずまぜうく 師無洞
まふれてええるしき也
めし涸とのさもする故
まくりのまなく
衣のまれなれどもつくぬ
孟 八命不待ゐ乾山水
今日雖存明又難保
涅槃經に
つゝりの 無かくしとき
老人も葉の御存知なく
ねうそてうとひつよと
いさりてよつくれ給んを
のゝく
三条のみや 細 女三のた
るすゑの御つひおゆらく
小侍従 細 女三宮の乳
母なり 此老人は
弁の乳母ゆゑ御嫁の乳
母の女なり
おつかひ世ついひ 細 の本あと
もりく師 義無に表する也

と寄りけるこの御心のまゝにこそ洞
らつれなき事にすぐすかなとゝもられ
のとらひ給ふこそまことにさまんのいたりうつつぞ 細 老人の細
しもの給ふ又給ふともと衣の袖まれ
わたうは命のこれしとこをあれとかゝる
ねさ・さらはさるらうなりの世なる給
なりとかり給へしめされ給ふる人・三
条の宮ようふさくひ小侍従くりける
なりけりてしのとしゝてぬし
のかくむつまじうことひまくし埋れし箱
の人なれくうはむけなる世のまよりの
かくせずいひつりしてさやうのはてさえ

此みの夢は大納言
細 御夢語也とせ
師 御夢の事いへる源氏
の心にかなへる様なりと
れいをとりて給ふに
へし

身ともおもひてたつねれば
細 こゝや十年ばかりよ
なりゆるし 師 葉
いまだ九歳ばかりなく
故按察大納言 師 桐壺
也 此の母尼が母也
女三宮の御母の事也
按りある也 尼は弁
かいふし

此みとせさせの給はんにはよにくらさふ
らひ給ふべき夢見給へしかな今日なん思ひあはせつる藤
大納言は世になくて久しくなりぬれば えしろしめさじ
かし其北のかたなんなにがしがいもうとにて侍る や
按察かくれて後 世をそむきて侍るが このごろ
わづらふ事侍るにより かく京にもまかでねば
たのもし所にこもりてものし侍るなりと聞え給ふ
かの大納言のみむすめ ものし給ふと聞給へしは
すきずきしきかたにはあらで まめやかに聞ゆる
なりと おしあてにの給へば むすめたゞ一人侍りし
のちなりせて此十余年にやなり侍りぬらん 故大

納言うちにたてまつらんなど かしこういつき
侍りしを 其ほいのごとくもものし侍らで
すぎ侍りにしかば たゞこの尼君ひとりもてあつかひ
侍りしほどに いかなる人のしわざにか 兵部卿の
宮なん しのびてかたらひつき給へりけるを もとの
北の方 やんごとなくなどして やすからぬ事おほくて
明暮物をおもひてなん なくなり侍りにし 物おもひに
やまひづくものと めにちかく見給へしと申給ふ
さらば其子なりけりとおぼしあはせつ 親王の
御すぢにて かの人にもかよひきこえたるにや

んあさやうの起のとそ
ときこうけむらやうる
西亜頭　文選男女日
盃舟かかやうと蒸乃
程かけるそへ孫なとのつ
をそて物のやま例こうと
かけり
さしぐきとう　細くらつ
思はあぢくいふ調く盃さ
しくらうおく部そとふ
ふし

めいんしとろりくもね
のかうり

うちおどろかれぬおやまく夢のごとし。
くもりなくさやかにてうつりもそ
らえ
かやうにかしこうは物思されとどおもく
れはかげつらすくかげりかしこきに乃
すぐれきこられでいとかくゆかしけれ
どけは人めをさげしきりてこそまふ
かかる物語はつうらつくしくおもてとて
ん。もうらくしうへきれどそこもことに
ぞひまくこそはるるさ地りふつましのこ
とゝそて佐きも物衣まりんざしばゝね
らんこの作りきうさのへ夢をれゆり
がらしかうへつやへれんと

んじとかぐうれのつさゝ風なられぞそひ
まつなかの月にうらいくらかるなん
とうやうらきらゝのかげまよきすゝ侍
のかみゝうるにかみくてさうりいとやつく
うらまれいるさかねのやへ雲ゆりひやう
へづそゆかりく衣かりのいにしへの娘衣さら
のれらるの二しつとをかくろさまちかゝ
じとゆけしのこまくりんかくいとおかしま
をさゝへきをことらうやそうしかどかけ
と
五葉の哥
わさかうる家路をさぞとらでゆらし
まきのかふえそさんこみかてり月なく

思ひけきさへる　細んのさ
ゆくどうくてさうとひ
あらそと暁ゆかぬこ
やく侍うる二盃つ
きねのやへ雲　盃汲猟哥
雲のやへおきなかうとう
よろつもちらんへよふ色
ゆくもちまへゆかうさうそ
八さかしとどはへてんど
悲の白雲　印八雲の治
方とぞいやうま隔かさ
さ海く
の娘衣を　細　葉只今
さいまりて宴ざゝゆりふ
しの地からしき浮乃
否ふさうして総色ゆき路
ふけんいかふとぶふれへ
印霧雲のへるの浮の恋
ならぬみうの上てあかれ
まいけてよも娘衣を乃
衣のれゆさ此かつゝありん
とんぶらしの恋とも
うふうとろしまかるうる

を　細 姉君達の人々まさにも理とし師ハ其のゆかしさを思ひつゝもあなたも
も真かりて見ゆべきまよく知らんともこといふもかたし
それしきことなくおぼしめしても　師 このこと
湖水のこと　細 れ歌の尾山ハ…の高き
方ハ雲ふかくしてひもすく又御らんじ
くらうらん。姉君よくおぼしめし
ありぬべし
さらなり　孟 ひめ君の
ことふまうけたる御事

雲のみね　細 紫の雲
かの弁のさ歯を長く雲
の八雲のさかなりさら
歯のさ御法の中ハを
くらうのさ人々と　孟 雲の
雲のあかりに又雲の
あらしまらうし　師 此返
弁の只八の字の法方を
おかり出さんへ人ため
の葉の弁上ハ只われ思

を作られけれど、さらにくりやをもとひて歯
つるさ歯とさやうの人のめされざりしかば
我ひとつまゐりひとさら、作らせまゐらせて
いてハめづらしうてさぶらん。是くりゆかし
つきへみくげんもひとれバ、御のいとつ
おしげなく
大 雲のみね紫の雲のの
いとつぶつれしてかしまられせとりて
しらるげさ…

いかにこうりかりかくめまされバ姉君もその下ん…
まことまみまゐる御事の次の句よりてうけまゐる下…
ありこ葉のしさうびおめしまゐる下…
なまんかうし此 常に我此
姉君らの法の御うと
もらしうとおるを
おくけまといる
なかくなかれて
細 一言も申す
多きとなり 師 也と
もまうしひかり
まこうりし多通と
我り八ハ…
姉君の心の中も
うかされつ
まの八あいて
まの世の人め
べきんの…
らんはとく
やがてよ物思
けふ別れし
おひのかの
まさらく

まされどげにうさるるしきさくとかな
うきとおもひかけもゆげむかぜに
なりけるかし
かくさまよりこさもしてかならず
あはれぬるさる
… 何のうきまうりうけるもあつさしこさふれ
… うのうりいはまうしかりされてくるそ
… はらうめしさぶべかめ…さるからせ
… の人めいくまてはしかふいかくずる御
… かりけるかもしとうくみしまるん
… とうく最ゐ人のさ別もひきうかし世も

わかき人さへしかあり
これをひとものこしぬ
河勅ニ依テ 和名 氷魚 花内膳
司式ニ云 山城国近江国氷
魚ノ網代各一処 其魚始九
月ニ迄ル十二月卅日ニ貢之ヲ
今案近江の田上のあじろ
よりひをの貢を山城
の宇治にてとりまうり
これにみすへのかずの
評 うるさきさるとも[illegible]
ひまのくに男のこよ
かい[illegible]まふ姉也 孟曰
これすらうつりて
細 我之代のわざなどは
世をはなれどもそて
まとよ[illegible]もはづき
なあらぬにいでき同し
かの世とゝすこし 孟
るの[illegible]の巻に依て[illegible]の
[illegible]とも之[illegible]
まとく 宇治
をしびめの 細 橋姫のこと

てこ山かけしてあじろのさゝのかずにいみじう人さはぎ
げすれども ひを 喪さじよしもなし
やのしんずる所にはしける事なり
とけうとものゝ人ぐらしつらくいふあや
しきことなどもよ聞かゆへまじとのくるゝ
とはこ世のいとこともきめかすら
ぐとのぞみさるにのの人まうひそら
これを見ずとすこしからぬのつゞき
さあらぬはいかずもの[illegible]て
あはれはこ男とも人ゝき世にはしもつげ
ら[illegible]はよいはぬさまへ給

八橋の[illegible]と橋姫よしとてうへの下句を[illegible]の男に[illegible]へより 師 姫[illegible]の代[illegible]
まりくと添のまくしまくさくの神ともあらそし
あまりて紫ゆりつましわの細をかけてゆかしべし 河海 古今
きこしひりや我を給ふんうぢの橋姫 そも[illegible]は橋の下に姫大明神とて
雑文の神[illegible]姫神よりひまふとの五段ありて又一段 作者明神のうまひまふと
いふさ遊よ衣うつしまのうさ八作者の所為にしたる

くきとしてはかりけるは
こゝ 細 疾之 師 何もと
まあへぞかりの折八右方
あまたこそ本ましかれとく
うしかる 細 姫君我方
の上を思ひやりて
思案ニ 句ハ叢の方とう
けてこの句以下姫君に
みつづきとく 孟 網夕
といふからの姫君の男乃
ことのみて
男さへ心きくと
細 此住宅 樗の木にゐて
他の物なり男さへうそと

のさがくさ神ぞあれかしなどあるの人
しとそ夜る人まけぬ 孟 女をかたやうし 橋をとかひき
むげまいらでさぶらひしてそそ 孟 宋玉時[illegible]肌立とある詩ニ鶏啼と云々
大人 れなまのりまじゆけるかんいそぎ
しげるとそをそいかりにそ
人 さしくる宇治の川かさわさ夕の音や 名 く
神ならしもん男さへうそそつ 蓮のゆき 孟 云 姫君のてい
おりしげまかきまく[illegible]をしもとく
とりて すの路へりとたりあれどもの車

ぬもとかゆつる
らりにつりてつろ給ふとし
ま　主人よりよつりて
のまふ直衣よ石つゝると
おいへ人の物語　孟を人の靠
まよひ給ひつるすども　細さ
うろ給しきとく　細云
左手の君あゝようひけん
さくりなど我ひかし
ゆうり　のゝすゐれば丶ひ
ゐとよひゐゝれで丶世
世となゐのゝれ人さゆる丶
給へ八りもめてみく　姉
君よゝらそれいて　細世
と細せゝらん

ゐく多りぬるく人〳〵ぐさつうじ哭あれ
ば君ゐ人〳〵ゐりとよしらそてくうりてさ
らせ給ひん因ど丶なるしてにあるべし
さどの給ひぬれかけてどとはいずれこの
人まぬるがけるてとらいよつうはしつり
れる給しよなすろ人〳〵川いかいぐ人の丶れなる
まうく丶よっるをて出かし出らう出りひ
しりへこあすく丶らて出也とりつり
おりしら一つれけくひとと出りるあにて
ひくすけ出りひ丶るれば丶て世るのりそ
まししつくそひちらけ文なり給
けら丶ちてとわりしぞてちろつ丶き丶へ

あのすくとくめ給そ
細者よ人〳〵れとも孟給
まとし師み　給る
く出く字れ　よう
あまりさしつゝる出
うのそらいいまもとう
出りゝれてこそらるを
とくさゆへうめれと
ひゐひし何のすとの
うり出かさとく
いよせうりし君の海ゐ
師性の尾山八君二めて
そりとまるまひし翁
尾こし孫君よ出す出を
いへるさんとく
さこ人のそく
細　中道の特監とう

しのおいぐしうるよ業ハ殺とさ給く
うひえらでずをつぎとゑおりてしりき給
おうつけるさい海めそしおのるくうぐ
めそへりてのそり我りよう乳王
ざまうんさりしるそくいとさ一ろくう
よ今もうへうこよのよ人とらやもく出れ
しゆうもへくうさん流山ごりうそ給う
人回殺とうな給そうとをそいふをう
まし霧のゆうしひうくろけい給よ人信
どうごいしとくうしきくまへるた近
のぞう今すう人には性あくぞのおいい人河
ねくうつとしもやうせらしの給へ唐おぐ人

むかしの歌よハ所社の
ことえし細井のしろき
うし古来よりの傳へ
あらく
そみんしまんかど
細氏七日所念社の名
乃布綾ありし所念
社よこもりの傳へども布
綾しきたりハあそぶ之
けさてかどとふで
所傳どもよ綾まよ
也、是ハ文乃姓ハ之
とみえたり

かうむげみらくさ御しひしらで。表よ
出ずしやつらく此けるよろひよりご（吉位のさみく）
の袖めかしさきせ綾。又のはるの時まり（八文への御つへ中之）
をはら綾やまごりの傳ども。こ乃
ごろのめかしゆいいとらろかそくらる
しらんど。さてかえしまず絵のふせさ
あかべらんと出ほしやうらくらあるさ
あど出ほらら。けいどとひらく出歯（八文の乙）
めしさならろれハいどとうすひんぞとり
もきをねけさこうともあどもく一く
よりのかどつ。あうくさりのだんとさ
らはしらみ。夜井ノへうのれぬぐさとくるの。（葉のぬぐひけつへ衣のさく）

うりの御ぞ
孟浩衣元組叢　四季記
こすうせく男とてもそ
くもうろまうくれまく
細柱子器の傳よ鑑甑巻
選客始覚意和平と
いつる詩、孟浩操ろの錦
繍をきこうとれて錦かれ
ね錦よ出て見しくら
らく疾くらとく慕乃
衣ゆても男ハうつらねハ
不似合とく
こめりしをと出うし
細巨の宮しかりのらん
之孟えやうにて心延
廿此歌

こえんよいつもじさりりの御ぞとなえ
らねちろさむやの御ぞんらよくら
そひちるもどめがつるをとらけしまく
男まうゑ之くぬりのあれいずれ何く
しりしね袖のかんへどもとらあれ
めずらうしうすん中くとうろせうらるる。
夜分入かこ白めかくにも白き也て
こらくすすが付そく男をやもくもかあ
すゝれどいとしくつけさまくんのお
ごん。うかひどうしうふひくらやとる
へど。康をとさんへれうらうづつみくゑと（盃業のうら）
もくぞそすらくねぞわちらるうや。ゑいハ
ごんのこ御衣るりいとめやとくこめりしそ。

あふみくにけいこうまで
まへゆるしまゐらせ候　師説
　細八家の伝し明慧
みちのくのうた
いかなる事を
てには業忠のやうにの
まゐらせそろ
やうみなれそろの
こよひ
かしんのうちまで
師家の無覧しあらん候。
雅忠のてにをはれむ
業忠はやゝまさるべし
此の発句よみおもふし
師ひとへにうたよみまわ
まうかめいとふうて
みるへし
二の家　細白家　いやく
のうちへうつりみなお
こまかく
傍しうかくしく業忠之句
ちかひ

かりしうちもそらとも
あはぬ　業忠は雅忠へ四大あり
なりけるかへりしまゐらせそろ
ことごとくのうちへせかせ
それでも　いろいろにつくりて
いかにうたけるもかく
ては業忠のかぎりの
あひ給ふべきやうにもる　しら
ゑいさうすゑこそ給へし
へらんこらと　ひとしき候の
めうしやうじやうやう
しらむまでのうた
すいかのかへしの山のやまり
おほせにしたかひまゐらせ
でんしきくゝのめのやうにあく
ま
そのうへに事々のち
よのこなかなかいまして
まことにつれしくも
まろしかるへく
わかるゝをまたものか
かなしかなれはむかし
つねにはらはなの
ゐくもあのよのあへき
のこゝろふく月の
いはのうちゆきて
いかにもかなしき
さらぬ世は
うらめしく
かのあはれのこと
世はなかりし

ちかくはなれ
まへなれきはしん
のこさ
すかはらのありさまの
きくしてくをうちもや
師是にうちの雅忠乃
琵琶湖の時のこと
そむかれたるのちに
されかうしかうきを
そまことにてきぬ
とかまゐらせそうらへ
まかなこそうた
うらみたてまつる
世の中にまかせ
五秋の白家

うしいふるあしく
細 業忠の御之師これはなしとなん也
絹の事也
なれたる身をいはん
細 まつ身ひろまは
いみじくいはるまじれ
ことり
いうぶつくる
細 いらくあくいかおし
くみへひきのべきぞうく
みちさわこしそ
細 白氏文集やそのうち御
みかれはるり、

このはしをいう
細 八雲の御せうし給へる
さはる人へのこれ
あれはそのかりよふり
会さるしかり

ゝ絹・さうし・いとくあくれらんでんから 宇治のこと
おもしを・ぢよふせくあしぬらぬ 艶書のくしつゝきなどしたる
よりゆくいとましひれう身をひき
こゑくやむべきけしきひかと作しね
いるすんけ侍んとさせしやと云まれど
いふくうぐいのうせまべきやすき
どもそ・すりなほしくいいとよろしきを
ねべきせず侍なれ・ちらくろへ侍く 今これもふく面白
やりあるれ・うるゝ家おわりゆく 細 これての世のことをいふ 暁 盃曰
さ女の地そへしさらなのびかすき
うと・山里めい・さるあ海あづまやの川
宇治のこと

おのうかりし月影の見え
とりけり 世人は
彼さまくの暁の侍れ
どもいみじく侍りける見えを
とりせぬてうしく
すかるらんなるや
盃 西行之なるや者也と
師説にまさにみくは侍る
よのんく
そそくてまゐらせて
白氏の文集之ぞたかいは
大きさのかすしとおほかる
まほにい本文まるくや
これすくまゐるとぞ
おかしけの 細 白の侍ん
べくかるのくわあまた
ど一入ゆかしく之給へ

まこといみじうねびたる海こそ・
うちとくべきわらんと・年比は思ひあつり
何くうとどうまつそどめ給しうぎる
き・月のかゝりし月影のことどもを
とく・まかなしんぞや・けしきひきね 宇治の人をさしてまさる人と也
さつりおうらんとぞ・おくもかくしき
おかし侍べきさまとふうしの山吹て
まめさらていとめでたうおかしけの
よろづのまどき人のかくふくおかる
を・とろかなうじとゆゝしう此をもて 盃
うぐりなくたからの代みてうし 細 業忠といへる
ことまへとしとめてめでたき

よろづけさと　細 ふかう
一の上﨟しきんく　晴
孟 よろづけいろ〳〵あさき
く師説はわすれぬれ
多く白のへし
いでやうしろすくそ
細 葉の細 師 女のうへに
うけ〳〵いうしろさと
なり
ものみぐるしうる上るへつまさ
ゆゑなるハ　我ありて通
世のへ源氏男のうへる
女よめをとして我心ろ
がら道世をまふ。まされ
心付そゝるるハ大きさう
本ざきらふかべきさ車
物かくしく
いぞあるくとくし
細 白の細 けり星てんぞ
ハ智細なり
ゑんそしし常とく
師 今ハくいさきまき
是細のゆしまきてうゑ

は男のなどのよきけさう紙しくえしたてゝ
ふりしすしと茶しられば、おりしくていぞ、（細 葉ハん）（孟 我ハ世を経るさまにて）
やうしすくぞ侍。さうし世中よふるとくめ
じしとひのあるやうあり男ふるくある代
そりごとしてつよしう物をもおもひかく
るあら心つきそめるは我わりくさまも
ひよきぶへきてしわん物うべうさし空そ
まへんぞいぞあみてびくしまいのれ（白ノ細）
どろくしきひぞりこし葉ごろくて（孟 葉のひる）
しげみそてふひ猶らろのくらり
みれのわらへの畑ろめし。しぶる（細 本のゝ）
ふよろうだに我よ深き見る侍るれてゝし
かりしげしくんれゝくめ衣ろ
よかくこよらしも。かもとしとさく（世上の女のこのよ月よ節を）

あぢろとして　師 網代と
天むらし八新しきもの入よ
いぞしく是八ふれしりの名を
よずのこしぞうらくし
ひとむし　細 蜻蛉とは
是。網ありおれ夕とあき
ね男ぞくに　師 蜻蛉を
お菓よしきへより
あしろ車　細 むらし八公
あふのもろりさる車之
師 是まふありて用ゆ
うとりのすみそし
衣 平緒の本衣なり着
八公卿も本衣よ平緒
と用ゆるへし　孟 カトリ
八平緒と用ゆ殿上人
是有之。又公卿ハ老者
衣冠ハ本衣ノ時着て
又服にも用ゆ

あたらしき何ぞるり心よもとは御しくざうり
まう十月よなりて。み六日の御じよ宮治
へまうで給おぼろ代としこれでうハ清らん
どあしくさうしめろへでありと。御つハその
ひともしはあくもふへのくわおろふと（葉御）
ありんしそぎすくあそてうらりかよあ（在具のうちどハ着略し待てとし）
じろ車みくりらりのるくとしてさしめつさ（河 縁直衣指貫）
めうそでごしきうへきまつり。ろ御まうらよ（河故着猶之ひハやむ）（細 ハ衣之）
ろそびまて。本よつけさりれあのじみむかし
しうたるり猶。みれぬれハ柳かとるすふく
ひらくそてきるくみたまへる文もこもの（総文ろとして）

きんのねおもわれなるか
のつゞく
孟 八丈琴の上をゆび
おは見えもなるを 菫
の乃さまひあらく 晴
まかども絃も 細 八丈
のかし仰せの風流をも

ちりくもの 細 ちくべし給ひて
思あるとすもわかべきこと
く師 菫の志くへきつるそ
れとちくべきて来もりお
らんとゝし
こゝにわのゝ一の 細 菫の袖
く一日やくく忘ざらかし
あらん鸚鵡(ウツセミ)ものしかと見つるま
共今来らべて又作れバさ
とおゝらくて強しきあへ
うつえ
れとのひさきりしてやともそ
ちかきへしうくそ
仰姫君の八すヶ蟾の穴
のねへるくれまりしい世楽
慈のしきと出へとおりま
さもおきさとく 孟 八丈
人まこりてやゝく

(河同松琴と山ちり後しみうて)
かくきうで、わくきりきさらうし地わくしさく。
(細 義現名ぐ入孟 後義て)
ごみどいくを給ひらをきうきまきとゆ
風のゆしわくそのしきるま未紫のらりふ
としゑの剣ぐきみぐ、哀もとらそて抱
梅そらしくゆわそさ一派の二海ありゝ鳴が
(細 非君の汎)
さらくみりぬらんと心ふ弱まおゝし
(ことを思ひかる)
志の心めゆりひむかれて琴の音風哀わう
(細 菫の詞て)
このつひぐくつきりゆくささのしび勇
まましくこれぬし明月のまいてもか
うさりつ音なとくゐうけ給かり
しのりうん来くまいゝらおゝしう
かりぞおひをのくろしゆのし給久と

とう絃もそひとてゝし始むりしこう
(イ三之)
しらしとされ志くあんしのくすりへど
(八丈の詞て孟とハ分そう)
人めして抱くしりしもそしゝつきさく
(のまきもつきまはらく)
かりよりまりや、ちらべらうりの音をす
(イ二まで び)
つりくちんやおうらくいうりかうしそ琵
(孟 菫まあつりせとわれハあて云く給て)
琶発つくまらうしくにそどのつしおふ
(孟 菫の詞て)
さりて志く、給、さしまわのくまさく
(孫川の琵琶の上八分うつと甲下て)
ゆしゆきじ抱しもおのくれぞらけう、
ゆしの剣ぐさうしおや ことしのまへ
(細 八丈の出詞て 師 菫の詞をとがめ給はて)
しかもうそ、ゆしけくもうきそそ給まん
ぞいくわるこゝろや、ちりれて、世まう
ぐきりのてをぐいづくまとりらつまで

ころハこゝの松風をきく
やまさとなるべし
孟 松風入夜琴にかよふなるを
いふ此の心は峯の松風が
よそふいづれの緒より
しらべそめけん又松風
吹人は一入の感あるなる
べし

ハつきりちらん、おりまじこゑ（さびしきは）
てらぞうさるへしきこえくるいしすくれは
ふもとしうえんみねの松かぜのりくるや
そなきしいうとうらくしげみやす
きてころかたんわかれもとりけりそ
やめ給ひこのろうようたすくてあら
くわのめくさうれてこのものそら給
ふちあやしきくあらはれどもそ
めそのむとあしそぞ給さうらあら
やうらよまうとくとあくうさあらそ
べうめりハ何すいてうりやうらあくすらん
孟 かつらハおりしと
りうのりのうりのよ次ぐうり

いとうこそあらんと
葉のうくまハうらそんな
らんやとともつひ引
入くとし
うくあやしうらげみ
せりひやうらくるとあ
ま海どもの
八宮の姫君うらり乃
げりぬあり海と人
のせりひやらへうしく
仰人のおもひやりとあや
しう世づきねていそ
うらとあり海よの心
く世づきねいよあれね
らくあり海どもとハ
姫君達のうへく
おもひのかうらするさとく
づしう世わいうり
細 比姫君達とりて其
まうす葉の心も恥し
くとく 孟 うらに山の
中にありハ恥しくきうと
八宮の諸抄世皆仰彼
一義に云う是ハ姫君の事を

あづさと海うしよらん世がしはとうく
細 八宮のうへのすらく
さうまをしまへとあすこよまくしすまへと
姫君達のうへ 此の世のすく
きひりまりしひりどどうさう給を
人ざまあうあれハいとうけはまうんとひ
さうりて給れさうぬとまでひくつで
のしまります人べどもうくゆれそまひてや
えすぬみれハいどくうちあしうぬがゆきの
つうぐみもうくあやさうげりぬきひや
つうあうくもくをみ給どりのおもひのかうる
るうしきどもふうしうゆかいうらん
ようていうくさうをどしとんぐでさうぐを
どさふあすくをさうぬ男の給うすく

とかくではなしうおもへるよつけて萩のくゝぐゝおやしうしうかねあひやり
とハおもしろのあひやりハ世すれどおやしき姫君達のあひの初に琵琶琴
あまの西施をうしめおつくしきハあひの初らおすゝと萩の秘なすゝまかおもしろ
うらよしそこにあひやらしかく似とひと義よるうかしうおもしろきりされで
そ法れみも恋もくやりひの初らすゝかするなかしへし
をまて解しやうさしや
ひとまくしら思ふ
ええせて人さ後
一言もなくまし私や
ぱしすとしへ行うま
じうしく

なかうまさ千すずふり来ら紋きんハやらお（孟 秋後いゝくおのみへんと八文の袍）（姫君さまの事）（孟 似後文きとも）
かれくゝすんゝしられのこゝそお
よ世とゝかれんさハの闇くしかりけれ
とうらうしゝひきんハいぶくかしうこそ萩（孟 萩のこと）
まかふわざしのわうしろうぶさらたろく（細 萩の何ぎ間わつましさし）
しきもちらよ行ゝそことぞうくしう（あくつまうん）
あのかりらど出ぞしめされむとおへあひまかうたへ
しをすゞん命の経ハひとゝとも
しうしり御中しさとてんさ風とよぶん行う

とまへいいとられしさ
こゝ出かしのまふ
孟 萩のよされさまば
八文の姫しとあるく
文の以とゝあひし給れて
よよのおいへめしむ
孟 八文の行法のゝうに先
人とめて萩の浮よ
なり
姫君の以しろく
細 家として弁の言の消
とあうり推察の意う
素園ようくなり

まじくうんみじゃのへハいとされしこ（細 八文の詞く）
しくかりしの給さてわつきゞゝ文のれ
ところひし給頼よみのおいへめし知く（弁之）
あひまうひめ意のいうしろをみくさふ
らうせ給弁の意とぞいひ乃年ハ六
すよをうしうねほどされど文ひゝよ
ゆへわうけらひしく抱などさうし也胡孫（こじん）
（柏木之）大納言の意のようにありま物せあひつ病（芳の）
つきゝうすくなり給みし病とゆめしか
くずつくこと限なし。げよりその人乃うへ（細 萩のこと）
とさうんじよ。義なるべきうらしくもと（萩の実文のへなれて）
まして年比出ほつらすくゆかしういかすり

かくいひつらつる
細 薫弁の志に同様也。又ある人のおもかげのよし。師 女三と柏木の中のまなく

ろんしのちぎりにや侍りけん。このよのこと
とさゞりたまへるをまつしともしんしつゞる
しみやうくゆゐんのやうに衣のかげそ
まつほかしぬつくよ（こ）こつけ給へん
とほかりそよおぼさるこく御えでさりける
（薫の弁なとの事也）
さそうくそのうれへるうち人々の
うらまつりけるをあつ（め）つゞりて給へり
しうをほかゆつしのもらによ給はい
ひつさつうしひやうるもわうんとし
（細 弁の志の事也 弁ハ今まても女人といふ事也）
まんけらくもはゞとはざらけうとその
まんぐ小侍従と弁とくるからてみえる
人ゆるしひとしもゆくもみえしも人へ

くらぎのひゞきしぞくりのてうきく数
すくぬ身のほどに侍れど、すくなからぬ
ゆかしまつるをりてはしくるそのづ
（女三の御方）
らうの御事ども、かすかにうけたまはりて侍り。
（柏木の心に思ひあまる時といふ）
にいとゞおもほえる時どいこゝらくうち
（師 弁と小侍従との事）
わりなの御よろぼしかさうの御せうそ
（柏木の末期の事）
このよひと侍しからのこゝらいとまれぐく
うちえしさも今はのとぢめよな
（弁か身をいふ）
まゆてさくらの給とこしの侍しきつう
（細 かくて薫へも伝へ申さるる事也）
身はいとどなくいかせくやふすへうさ
（弥 心しかるし給し）
あつからめくそこうしめつうえ
そしぞくしうぬ今のそのついでよ

伝ハ世におゝきすゝなり
伝とハよすハ世にあれバ
しそ此れひのうち人分
となり
けらんをききくへてきも
華にみんとへてきもあ
つましく栢木の父のこと

この文ことかきも
八文のうち人華の外かの時
と侍ありける

とおりひとつへつり候。候ハ世におかしき
ならとなんおりふし文ちりめづらしきんぜき
とくさりのこと侍り。今ハ何をかやさしき袴
侍らんぐ例父のさしとちてね身に
とそ侍ばいかにも分やうとこそといと
しろめしく出すれどこの文ちらに
と時ぐさりのめづらし世語をまいらせいて参り
しらべすちしこのはしくいふかりけるや（弁カ出具く）
と念じ侍りつらしく出ずりでこなく（是ハ常世の宿縁なるべしとく）
みんきしよれハこの世ハしらかに侍り（華の誕生ひくのて）
けしからぬく闇にまれ語り候の（細栢木のこと）
しらりくゆかしつゆかのしらり

春よりもよらくこと（葉スヘ）
細栢木の若衣に若母
の服をきかねること
と此よしぬ
細弁を索と出し今なり
ことく大武小武など
よ具して語りける
人どもらぐらて
西こちこしてまへ弁
をさびりてつしまで
ゆきしと

此文ハ文方につくく
細姫君と歎れく所弁
尼かちて大弁弁の字治
文の小弁乃母くのお
ちなり

語しさいぞまに母よ侍し人ハやうく病（異弁ク母ハ栢木の乳母く）
つきそほどりへぞうけれ侍りめしかば
いとくせひまへなりで藤ころもうち
かさねられしことともひまへ積に
そでのうらしぬ人のこころをとづけ
ありけるが人をあらわしてみしかは（詐ハイツハリコツ）
海のそそぎくそわりくまんへうのしら（弁をつれゆきさまかる事）
ば京のことさんおしかえて其の人とら（細弁ハ男にてありし）
しこえてうを侍りし後すと世あまら（今所弁か衆く）
まくなんおくね世のならしく侍りの
おりえとしとうのこやえらく さようる
ですらへまりうらふゆへ侍しつべハ令

かゝる世にまじらひ人をさへかゝるを給ひね
女御吟泉院の女御のくれなゐゐあまりこそは
昔こそあれ　いまはかゝるめくまり
すべく給ひけども　いとすくなきそ
えさし出給ひてみ山がくれの花にあり
まく給ひけり　小侍従といひし
よもすがらのことのはかぎりとて給ひ
人いとすくなり給ふる末の世に
ありくの人にとむかひ命をもちて
へくれて　心すみめぐらし給へ
まことゆりけるに　いのちけりて
　さしかこの昔後侍いつきさんりん
ねたく人はかゝるやうにおもひてこそ
こし侍従とひし人いはのほれ
はゆるいはくしろうらなり
みや〓よむとやそむを思ひ
んとくつるに心すくはつま
身みくさめくらそこの
やうにおもひすさめの
ひくされとかのよみの
つまらくなかんこそしるを
秋のことくもおもきとりま
の給ひをて此文をとり
給もせよりしうべく侍るよりも

後撰よみくの歌しとく
やがて別行なり
細 西海とよりしてと私の
説とし 師此集ガ私の説
と八不行成ガ別のうと
こつまわりはは文をを
後へななりの説をかはせ
つまゆくて
師 此の文とは葉のとり
てをきまって 師かくり
いろはをおくしきと何と
手くまちそうて此文
とよりのゆく
まりやしみ出すひまばれ
まふ 師わかてよしを
てしまって
うらのれのの思もわき
ぬらん
袖忌の種八割入停止られ
どももわきわれば来内
ももへーしとく
院の女一宮 師 冷泉院
の女一宮の内をよく母后
仕へたの女

らんつぐくよふくつまつらん事つらんと
せひまへしをやがく別行りわせと、ま
さりしごとかはわるとそうれしうかん思
ひまつりとこう也つれなくてこれへう
くい給ふかるのふらんへはとばつらりは
やおやあこさことのてめしにひひわらんと
うらしく浮めでし、娘くふ一つへきねよ
しとちうひつみさをやよりてさやすひこ
ざれすふれ〇こはいひおいてまり給、
細 八文へ下すると 孟 暇日
のふいてしまの日すりしいぜ、そふ八と、
のはりのいそをわきさぬらん後の女一宮
うやく給ゆらへしひよろすしんまししりへ

くえくきうしう世
細 八文怪異しめらく
孟 八文猶之葉の御おり
河 蔵売よ山の陰も明
けらうあらく
後御子の女ノ
細 御木の判形わまり
孟 御木 卦しまく

られどもいう雨まくえぐつきとゆうる
らのえかもらして、山の紅葉ちしぬされ
よまつうつへきうしまっし給へさく
さらりしせまひりは、山のかけもさ
うしりのおもさらしかうもうきんなで、
まろび驚く給ふうちそてまつは袋をと
ましまへども、しのつくをれぐとめひて、
回 唐ノ浮線綾 糸をかけて織る綾
よどいふりしとふくつまきとうかをそき
くりしてらのうきとゆひ すなみは後
うれわりつきさりわららもゆそうしう
黒く給ふ多めくのこいわくちさうよかすひ
細 女二宮の御かたさ
なる御ふさの名てすいつてもいやそあわうさ

さてハうの花ゑましそく
細 益気之女三ハ妻のへき
物く孟 柏木の手紙に此
文ハ女三ノ文ヘ也つしすん
さんそしうふを弁つ
有子も愛し 師 作者ハ
朝しゆへ作へんうう
今さにえくべし
ゆうしうへのとしハそそひは
しうり 細 對面もたえさこ
とうらく源氏なれば
かり 哢 柏木いまハのかと
かれハ女三宮をおんそて
ひようかり
見鳥の跡と 河 蒼頡見鳥
跡始作 文字
めのまへは 細 源氏をさ
へさやうに 亨 契をたに
さきそひうて おもりを
まさく康よ行んあを然し
きのゆへ 孟同 仰せ事れ
なとりへてよめりなり

ていめのてみろく 細 柏木の心の心 あまりくくうりま
なりまうまゑれのかみとまさしと
うくなりめりハ 細 女三の宮の兄る所へ也 ゆりしうやくとなる
ひかうり れりうらもうそりておうして
そうんかへさ おくれしさらしととうらの
くようとおんせんうつひぐくとおやし
き鳥のあとのやうよのそうく
柏 めのまへ手二の世をさきしむきうもよ
そよわり 柏木の宮のうつし 海ぞるれしこやうさそ
まめ 細 葉のさえ 孟同 しくそうしくるる二部の躰ぞと
しろかそうらひよあうさは、ま

うけめくらう 細 源の側よりて人をとりうけハ物りふかくりりうへ
かきれハうりの紛失のうしろめそくえ物をとき合よろ
人のいと敷ろらく
含あつハそれとも又あり
孟 余わうハ紙子とてひ
てアつんぞうつく 伯之の
文の奇之
ゑそとりふかし
細 十題虫頭いつうろよむ
孟文も月日つくわれ
ぞあらのすとうぞさ
まりと定家のまりうと
うのんよりくし 孟 蠹
蟫 白魚 和名 衣魚 紙魚
白氏文集 十四 紅牋白紙両
三束 半是君詩半是書
經年不展縁身病 今日
開看生蠹魚
細かうくして 細 門 うきこつろ
紙へいみと世もあうかのぞ
とれをとあのよんやくなう
らん
けま蒔ちり あすま寺か
いひことバとめてあそ

柏 いのちあるべきそれとをみもりく人まれとど
思ねよとそり松のおひへともさ、きうしつや
うまびとそうりけくそて、御経の色つ
しうんまへうさつけうりさえとつむ虫の
もとうまかて、山子めさしあひびく
さくおくしおとへさて、いまよりうさ
ふんみをきうくね女の躰らきのさ海
みつまきこるるをさ經まりげんめ地らくゞま
よりましくバとうしろめくろうりそと、れし
きしくどをかうりうこと世をかう二あう
んやとらひよ何よいとどりのせうくしさそ

せでだによならひくる
ならし
うらへまつらんとおぼす
つるも
宗渡まて日の出おはしても
わきかへらんとのたまひ
て素内わらんとおひ給
ひしうくもとく
こそうまきみふとそらぢ
らひく
孟女ハ経にてもむつ
しハ今なくせし

ひて、思へかへらんとおぼしつゝも出てくれ
ぞ。（細 女三宮之 孟 葉の女三宮へまつる事）かやの御まへよかへりまゐれハいかなる（女三宮の事）
よぶろのすくまゝやよせの海しまて。
給ふぞ給をそらじひとくれそうらし
まくら。（葉のうへ）おまへのれ（孟 柏木のうへを）ありよかりともおもう
思てそ思ふらんなじらくらよこめそよ
うへよかりへおもしきくり